

久保田 華布
KUBOTA Kaho



残像の記録、記憶の残像

金属メッシュ、針金、塗料



残る像

残像として網膜に残りすぐに消えてしまう像は、一瞬の時間の記憶にも思われる。像(=時間)は一方向に進み重なり、途切れることはない。しかし、その個別の重なりを現実に見ることはできない。残像とは動いているものを見ている時や光などの刺激対象を見た時に網膜と脳に残った像である。また、残像は主体一人だけが見えているものであり、動いている像と像との間を繋ぐために脳が生み出した想像の像ともいえる。

修了制作では、残像という瞬間的に消えていくはずの像一つ一つの連続を立体によって現実の空間に可視化したいと思った。

私は残像の表現方法を考えるにあたり始めに連続写真やアニメーションの原理を参考にし、連続する像を針金の線で繋げて立体化し空間に配置した。ところが、その場合では残像としては見えないままである。動いているものや人、写真のブレによる現象を観察したところはっきりとした像の形は追えず、更に像の形が曖昧に見えた。そのため線としてではなくメッシュ状の金属で造形することによって形が曖昧な像を表現し、立体の「透けた像」が重なり合っただけ動いているように見せた。すると見たことがあるはずのものが残像を残しながら進む不気味な存在となり、私自身が思う残像に近づけることができた。「透けた像」(=過去の時間)が現実の空間と混ざり合い、今の時間の中で残像を感じられるであろう。

この作品のモデルは兄である。私にとって兄は同じ環境で時間を共にした、積み重なった記憶の存在である。兄の些細な動きには独特な面白さがあり、創造の刺激を与えてくれる存在でもあった。作品を制作することによって私は、現象としての残像と残像のような記憶を重ね合わせながら、兄と共有した時間と記憶とその存在を確認しようとしているのかもしれない。

残像は一瞬で消えていきながらも、対象が動き続けている限り新しい残像が生まれ重なり続けている。私たちの日々がまさに残像のようだと思う。時間の流れの中で動いている私たちも幾度となく残像として、そして記憶とも交錯しながら重なり続けている。その重なりを全てを見ることはできないが途切れることなく今に繋がっているのを感じる。

人は時間という共通の概念をもっている。消えては現れる残像の中で、自分の重なりと他者の重なりとが相互に影響を与えあっているから「時間」の存在を感じられるのではないだろうか。残像を見ることはできないがその重なりを作品として制作することで存在を確かめ続けていきたい。